

「県民と県議会との意見交換会」 久慈市会場の概要

〔日 時〕 令和2年12月23日（水）13：05～15：07

〔場 所〕 久慈地区合同公舎 大会議室

〔テーマ〕 若者の外部の視点から見た県北地域と地域振興について

〔参加者〕 （5名）

田 端 涼 輔（久慈市総合政策部 山根市民センター）

藤 織 ジュン（合同会社未知カンパニー代表社員）

大 原 圭太郎（一般社団法人 f u m o t o 代表理事）

城 下 哲 太（洋野町 特定政策推進室）

伊 藤 剛 史（農業）

〔出席議員〕（9名）

吉田敬子議員（座長）、佐藤ケイ子議員、菅野ひろのり議員、千葉秀幸議員、城内よしひこ議員、米内紘正議員、中平均議員、ハクセル美穂子議員、小林正信議員

〔オブザーバー議員〕（なし）

◆ 参加者自己紹介及び現在の活動状況等について

○藤織さん

出身は東京都で、久慈市の地域おこし協力隊として2年前まで活動していた。任期の最終年に合同会社プロダクション未知カンパニーを起業していまに至る。私は、ひとりの会社であるが、主に久慈市広域の観光PRを行っている。行っている内容としては、イベントのMCや、全国を回って岩手県及び久慈市のイベント等に参加して魅力を発信したり、地元で行われるイベント等の盛り上げ、SNSを活用した発信、インターネットを活用した販売をしているほか、海女の活動もしている。

いまは、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けており、新型コロナウイルス感染症の陽性者が出るとイベントが中止となったりすることもあり、大変なこともある。最近では、オンラインイベントや復興庁主催のイベント及びインターネット通販等を充実させたりと、このような状況の中でもなんとか生き残っていきこうと頑張っているところである。

○大原さん

出身は宮城県仙台市で、東京で就職をした。洋野町には、4年前地域おこし協力隊として赴任した。妻が洋野町の出身であることが、きっかけの一つになった。当時は洋野町に限らず、自分の出身地である宮城県の周辺地域なども対象にして仕事を探していたところ、洋野町の地域おこし協力隊の募集を見つけた。最初は観光担当として働いた。観光担当として働いていくなかで、地域おこし協力隊員がひとりで観光に取り組む難しさを感じ、同時に地域おこし協力隊の制度自体の限界を感じることもあった。任期の3年間で次の道筋を作っていくことの難しさを感じたため、民間で地域おこし協力隊を受け入れて、活動を支援したほうが隊員にとってもよいのではないかと考え、洋野町役場に相談し、いまの法人を立ち上げた。

現在の事業としては、洋野町の地域おこし協力隊の募集や、現在受け入れている地域おこし協力隊員及びこれから受け入れる地域おこし協力隊員への活動支援を行っているほか、洋野町から関係人口創出事業を受託したり、岩手県内の地域おこし協力隊に対する起業セミナーを受託している。自分自身、地域に来て学ぶことも多くあり、感謝している。

○城下さん

私は昨年7月に着任し、体験型観光推進員として、主に、民泊の誘致活動や当日の運営などを担当している。出身は神奈川県で、洋野町との縁としては、両親がともに洋野町の出身である。いまでも祖母がひとり住んでおり、私はUターンではなく、いわゆる孫ターンとなる。

昨年の活動としては、民泊について、洋野町で神奈川県の高校生を約200名受け入れた。これは過去最大規模の受け入れとなった。その際に、受け入れ先となる家庭を探したり、学校との連絡、調整を行ったりした。また、翌年以降の誘致につなげることを目的に、東京都や大阪府にある旅行会社に対して洋野町への教育旅行を誘致するための営業活動も行ってきた。

○伊藤さん

出身は青森県青森市である。大学進学で東京へ行き、そのまま就職をした。東京では13年ほど仕事をした。仕事内容は災害救助で、岩手県にも来たことがあり、親近感を持っていた。

地域おこし協力隊としては、二戸市の果樹生産の農家に就いて生産の勉強をしていた。主にりんごの生産をしており、3年間ほど勉強して就農までこぎつけた。農家として独立してからは2年になる。

○田端さん

自分のミッションとしては、久慈市山根町において、昨年7月から空き家を活用したコミュニティスペース、カフェの運営を行う活動をしている。これに加えて、ことしからは久慈市内でキッチンカーも出店している。

地域おこし協力隊の活動は来年3月で終了し、終了後は、現在のカフェの運営を続けていく予定である。

◆ 意見交換

○菅野ひろのり議員

きょうは、県北地域とその地域振興についてというテーマであるが、地域を知る、あるいは地域を振興していくうえで、地域の魅力があると思う。皆さんが考えるこの地域の魅力と感じることは何か。また、同時に課題に感じることもあると思うので、両方お聞かせ願いたい。

〔回答：藤織さん〕

久慈市広域でみると、非常に多くのコンテンツがある。例えば、北限の海女であれば、海女の観光文化が残っているのは久慈市だけであり、世界的にも珍しい文化が残っている。ほかにも琥珀がとれる大地があったり、三陸ジオパークも同様である。また、塩の道や塩づくりの歴史、闘牛大会、短角牛の歴史など、さまざまなストーリーもある。自然もあり、美味しい食べ物もあり、とにかく魅力的なコンテンツがたくさんあるが、これらが住む人にとっての当たり前になっている。また、昔からのやり方を現在でも続けていることも多く、いまの時代だと伝わらないのではないかと、いまのやり方だと後継が出来ないのではないかと思うことも多々ある。私も、PRの方法を模索しながら、どのように伝えたらよいか考えながら取り組んでいる。

〔回答：大原さん〕

洋野町にも魅力がたくさんあり、特に海やウニなどの海産物が魅力であると思う。自分の現在の活動にもつながってくるが、魅力を伝えるという部分で、伝える方法と、一緒に取り組んでくれる人がまだまだ足りないと感じる。そういう意味では、地域おこし協力隊の方を支援していくことが大切であると考え、取り組んでいるところである。

個人的に感じる課題としては、地域おこし協力隊を募集していると、昨今の新型コロナウイルス感

感染症の関係で、地域で活動したいと考える人もふえていることから、このような人たちをきちんとサポートする人間が必要であると感じている。

【回答：城下さん】

洋野町に引っ越してきて実感したのは、人が優しいことである。昨年、地域の夏祭りに参加したときに、隣に住む人と仲良くなり、生活を気遣ってくれたり、食事に招かれるなど交流がある。神奈川県ではこのような人と人とのつながりはなかった。人との交流が煩わしいと感じる人もいると思うが、私は優しさを感じ、とてもうれしかった。私が生まれ育った地域にはない関係性であり、魅力であると思った。

洋野町で地域おこし協力隊になることが決まり、移住することになった際に、若者が住みやすい住居が少ないと感じた。自身の活動に関する面から話すと、民泊の受け入れについて、以前受け入れてくれた家庭も、高齢等を理由に受け入れてもらえない例もふえている。新規で受け入れてくれる家庭は少なく、どんどんキャパシティが減っている現状である。今後の民泊受け入れについて、大規模な受け入れのニーズがあった際に、洋野町だけで対応できるか不安がある。

【回答：伊藤さん】

前の仕事で全国のさまざまなところを回ってみたが、どの地域にも良さはあり、岩手だからという特別な魅力は特に感じない。住んでみてわかることも多いと思う。自分も岩手に住んでみて食べ物が美味しいと感じたこともあった。結局、住んでみないと良さが伝わらないことも多く、情報発信力の差がポイントになるのかと思う。

課題だと感じたことは、地域おこし協力隊として来ると、さまざまな支援をしてくれるが、その支援してもらおうことに対して、快く思わない住民もいることが事実である。外から人を呼び込むためには、そこに住む人たちが楽しそうにしていないと来ないと思うので、外から来た人だけ優遇するのではなく、そこに住む人たちが楽しいと感じる取り組みも大切であると思う。

○菅野ひろのり議員

いま、皆さんからお話を伺って、PRすること、アピールすることがキーワードであるように感じた。例えば、藤織さんは、全国で久慈市の魅力を発信されているが、PRした際に、県外の人たちはどのような内容に対して興味を示してくれるのか、お聞きしたい。大原さんには、民間の立場から地域おこし協力隊をサポートする活動をされているが、その活動について詳しく伺いたい。

【回答：藤織さん】

いまは新型コロナウイルス感染症の関係で、さまざまなイベント等に参加できない状況が続いているが、これまでの例だと、ドラマのあまちゃんをきっかけにまめぶ汁を知った方がずっと興味をもってくれており、久慈市に来たら食べたいと言ってきている例や、ことしは、オンラインで短角牛の魅力を発信して、食するイベントを行ったが、赤身の肉がこんなに美味しいと知らなかったなどという好意的な意見をもらったりした。ただ、全国規模のイベントでPRをすると、岩手県、久慈市、北三陸などの全国的な認知度が低く、なかなか食べてもらう、触れてもらう、買ってもらうところまで結びついていない、至っていないように感じる。

【回答：大原さん】

これまでは地域おこし協力隊の募集を行政が行っており、希望者から問い合わせ等があった際に、行政の担当者が事務的に回答することが結構あった。自分が募集から携わるなかで、地域おこし協力隊の希望者と、オンライン等も活用して応募前からコンタクトを取り、できる限り希望者がやりたい

ことが地域とマッチするか、事前に話をして相手に納得して応募してもらえるよう取り組んでいる。また、地域おこし協力隊の制度自体も、市町村によって違いがあり、詳細な説明がなく、わからずに活動していた部分もあったことから、丁寧に説明している。

実際に協力隊として来た方については、年間の目標を設定して一緒に伴走したり、地域の人との橋渡し役をしたりしている。具体的には、農業をやる人に対して、一緒に農業委員会へ行ったり、自分が知っている農家の方を紹介する等、個々の状況に応じた必要な支援をしている。

○菅野ひろのり議員

地域おこし協力隊の皆さんに対してきめ細やかにサポートをしていただいているとのことでは有難うございます。わたしも農業で黒毛和牛の繁殖をやっているが、全国にブランド牛がたくさんいる中で、いかに来てもらうか、食べてもらうことにつなげるかが大切であると改めて感じた。

○千葉秀幸議員

皆さんの話を伺っていると、岩手県はまだまだ素晴らしい点があり、これを伝えていかなければならないと感じた。皆さんは、地域おこし協力隊の任期が終わる時点で、さまざまな選択肢があるなかで、岩手県に移住することを決められたが、移住を決めたポイントは何か。また、それぞれ事業をされていると思うが、進めていくなかで困難な場面もあったかと思うが、行政からの支援等があったか。また、行政からどのようなサポートがあれば力になると思うか。

【回答：田端さん】

地域おこし協力隊として岩手県に来た理由は、大学時代に震災ボランティアで来た際に岩手県の雰囲気がよく、岩手県のどこかで就職したいと考えていた。いったん名古屋市で就職したが、地域おこし協力隊の募集を知り退職してこちらにきた。その際に、はじめて地域おこし協力隊を知った。

行政からのサポートについては、自分の場合、カフェを運営するミッションが決まっており、いちから勉強していくことになった。カフェのように専門分野になってくると、サポートしてくれる人が少ない。自分で勉強するしかなく、大阪府へ研修にも行った。今後、専門分野で地域おこし協力隊を募集するなら、募集する分野の知識を持った専門知識のある人を一緒に勧めるなど、必要なサポートを行っていく必要があるのではないかと。

【回答：藤織さん】

久慈市に来る前は、東京で俳優をしており全国を回っていた。当時はアルバイトで生計を立てていた。たまたま久慈市に来た際に、地域おこし協力隊の募集を見つけて応募したが、3年の任期が終わる際に、東京に戻ってまた役者を目指すより、久慈市で自ら事業を行ったほうが仕事になるのではないかと考え、久慈市に残ることにした。移住を決める際の要素として、その土地の雰囲気やそこに美味しいものがある等、さまざまな要素もあると思うが、結局はその場所に仕事があるか、そこで生活できるかだと思う。

地域おこし協力隊の在任中に、その場所で生活していけるようなビジョンが見えてくれば、移住する人がふえるのではないかと。

【回答：大原さん】

自分は、地域おこし協力隊の任期が終了する時点でこのまま残るかどうかが悩んだ。いまの事業が出来なければ仙台市に戻ったかもしれない。任期終了後に仕事があるかというのは大切だと思う。地域おこし協力隊の仕事内容は特別なものなので、協力隊の延長上で同じような仕事があるかということ、地方ではなかなか難しい。どうしても、自分で起業するか、既存の企業に入って働くしかないことか

ら、自分は、行政の力も借りながら、いまの事業に取り組むことが出来たことに感謝している。

行政からのサポートという面では、行政に相談した際に、既存のビジネスモデルが物差しになっており、既存のビジネスの視点からアドバイスされることも多い。地域おこし協力隊の活動は、これまでにない枠組みでのビジネスモデルが多いことから、既存の枠にとられない支援が出来るかが重要なのではないかな。

〔回答：城下さん〕

大学で地域づくりや中山間地域のコミュニティーを勉強して、漠然と田舎暮らしに興味があった。なんとなく、東京で定年まで働き、退職後に田舎に移住して農業をやったりするのが良いと考えていたが、ふと、もし田舎暮らしが合わなかったらどうしようなどと考えることがあり、早いうちに一度田舎暮らしを経験してみようと思った。どこで暮らそうかと考えた際に、洋野町がとても好きで、私が進路を含めて地域に興味を持ったきっかけとなった場所でもあり、ちょうど地域おこし協力隊の募集もあったことから決めた。

洋野町に来た際に、役場の担当課の職員から業務とは関係ない生活の面からもサポートしてもらえた。業務面についても、仕事の内容等を引継ぎのような形でつきっきりでサポートをしてくれた。他地域の地域おこし協力隊の話を知ると、地域おこし協力隊の制度に対する理解度や活動意図等について、行政の担当職員間で理解度に差があり、その差が協力隊のメンバーが円滑に活動できるかどうかの差につながっているような気がする。

〔回答：伊藤さん〕

二戸市で地域おこし協力隊に携わろうと考えたきっかけは、二戸市で畑が見つかったからである。もともと田舎の出身であり、田舎に対するあこがれがあったわけでもない。移住についても、二戸市に運よく適切な土地が見つかったことで決意した。自分はリンゴを生産しており、日本一の生産県である青森県の農家も訪れるが、就農については青森県のほうが適した土地があるから是非と、熱心に誘ってくる。やはり生産量日本一の県にはかなわないと感じている。移住について、栽培技術を教えてもらえるのもありがたいが、その場所で何ができるのか、持続可能なものなのかどうかポイントではないか。例えば、地域おこし協力隊の任期が終わったあとも、就農できる土地がある等の提案ができれば移住もしやすいと思う。

行政からのサポートとしては、農家とのパイプ役になってもらったり、販路のアドバイスをもらったりもしたが、まだまだサポートが足りないと感じる。東京などでは、新規の就農に興味を持っている人はたくさんいるが、情報提供等が不十分であると思う。農業に興味を持ってくれる人を絶対に離さないという気概を感じない。例えば民間企業だと、採用に対して非常に大きなエネルギーを費やして行っている。絶対一人前にするつもりで育てるが、農業についてはそのような気概が感じられない。

また、構造的な部分では、実際に農地があるといっても良い土地は限られており、やる気がある農家に良い土地が行きわたるよう、既存の農家も含め適正な競争が働く仕組みが必要だと感じる。

○千葉秀幸議員

皆さんからお話を伺って、職場環境が合うであるとか、地元の魅力があったからというのが多く聞かれた意見だったと思う。今後もこれらをテーマにしていくとともに、若い方が目標をもてる、若い人たちの芽をつぶさないような体制を整えることが必要であると感じた。

○米内紘正議員

2点伺いたい。1点目は、実際に移住を決める前に何らかの岩手県とのつながりがあった方も多いと思うが、もし岩手県とのつながりを持たない人がいた場合に、岩手県に移住したいと考えると思

うか、あるいは、どのタイミングで岩手県とのつながりが持てると岩手県に移住したいと考えると思うか。行政はきっかけを生み出すために、どのタイミングでどのような手を打てばよいと思うか伺いたい。

2点目は、学生時代にその地域にいなかったため、移住してきた際に同年代の仲間や知り合いがいない状況だったと思うが、地域の同年代コミュニティの輪の中に入っていったか、また、入っていた方は、どのようなアプローチでコミュニティの輪に入っていったか教えていただきたい。

【回答：田端さん】

きっかけづくりについては、関係ないところから人を呼ぶことに関して、例えば高校生の段階で、3カ月間住んでみることや地域にしかできないことなどを楽しむことを1泊2日でやるなど、興味をふやしてあげる。引き出してあげることをしたほうがいいと思う。興味がなければ地域には来ないので、東京に住んでいる子供が、地方でできることに興味があれば、大学で専門分野に進むなど選択肢がふえる。大人になれば選択肢は減るので、子供の段階から来ていただくことは大事だと思う。

地域から出ていく人を減らすにはどうすればいいのかについては、私は早目に出るべきだと思う。早く出ないと自分が住んでいるよさはわからないと思う。早い段階から出て、体験して戻ってくるという経験を積んだほうがいいと思う。

同年代のつながりについては、私はサッカーが趣味で三重県でもコーチをしていたため、今も中学校でコーチをしている。私は声を掛けられたので入っていたが、声を掛けられない人に関しては、行政が関わるのが良いのかはわからないが、担当者などと一緒に話し合った上で、子供が興味のある場所に連れていくなどのサポートは必要だと思う。

【回答：藤織さん】

私が久慈市に移住した理由は、前職のときにたまたま久慈市で公演することがあった。久慈市のことは何もわかっていなかったが、ドラマのあまちゃんのロケ地と知った。一般社団法人久慈市観光物産協会が、当時3カ月間海女をしながら観光PRするという住み込みの仕事を募集していた。その3カ月間に公演がなくなり、知らない土地に住んで、やったことのない海女をやったら人生経験になると思い来たことがきっかけである。3カ月で終わってしまったが、久慈市の魅力に触れ、もっと住んでみたい、PRという仕事を続けたいと思って、久慈市の地域おこし協力隊に応募し住めるようになった。

私が大人になって移住するとなったら、きっかけは仕事だと思う。いい景色、いい雰囲気があっても仕事が無ければ、旅行はできるが移住はできない。コロナ禍で職を失って東京都などではホームレス状態となっている人がたくさんいるが、岩手県に来て1次産業、2次産業についていこうとすると幸せになれる、お金になる、食べていけると言い切ればたくさん人は来ると思う。しかし、来る際の交通費はかなりかかるので、その辺はサポートしていかなければならないと思う。東京都では、給料は高く見えるがさまざまなものが引かれて、生活する上ではかなり苦しかったりするので、仕事があれば岩手県に移住するという人は結構いると思う。

同世代のつながりについては、今はSNSなどでつながることができる。Facebookなどでつながっている。地域おこし協力隊は友達申請やイベントに参加しているので、若い人はつながれると思う。

【回答：大原さん】

移住するきっかけは、働き方や生き方を東京で暮らしていて考え直していた時期であったため、地方での仕事を探して地域おこし協力隊になった。今は多様であり、グラデーションがいろいろあると思っている。地域おこし協力隊の募集をしていると、岩手県に縁がなくても、働き方や生き方などを見つめ直し、働ける場所を探している人がマッチングしたときに来てくれる。

大学のゼミで地域活動をしていることがきっかけで、地域づくりにかかわることをやりたいなど、いろ

いろいろなきっかけがあると思っている。

まず、教育が大事だと思っており、地域の小中学校や高校でも地域のことを学ぶ授業がふえていると感じる。将来的に、どの程度地域への愛着につながるかわからないが、自分を振り返ると仙台市のことはあまりわからない。しかし、子供の頃に地域のことをしっかりわかっていたら地域の愛着につながると思う。

仲間に関しては、家族がいたので地域での仲間や友達はいないが、私が受け付けている地域おこし協力隊がふえているので、その人たちは同じ志をもって一緒にやっている仲間だと思う。現在の地域おこし協力隊は20歳代なので、地域活動を体験し仲間になってくれていると思う。私の経験では、地域になかなかそのような環境がなかったので仲間は必要だと感じている。

【回答：城下さん】

現在行っている活動を含め、田端さんと通じる場所があると思う。民泊は、直接移住につながるわけではないが、一つの選択肢となるきっかけづくりになると思う。見たことも聞いたこともないところに住もうと思う人はいない。昨年受け入れた神奈川県の高中生も、初めて岩手県に来た人もいれば、岩手県洋野町に来るのも初めてであった。バスを降りた雰囲気は、修学旅行でなぜ田舎にという雰囲気があるが、2泊3日の民泊が終わったとき、ここに住みたい、将来ここに来たいという声は何人からも聞こえたことは、運営をしていてとてもうれしい。発言した高校生が100%住むとは思わないが、活動を続けていくうち、自分が生まれ育ったところではないところに移住したいと考えたときに、修学旅行で岩手県の田舎に泊まったことを思い出し、選択肢の一つとなればと思う。

同年代のつながりについては、洋野町役場の職員やそのほかの地域おこし協力隊で年の近い方と食事や遊ぶことがある。去年は、地域のお祭りにも参加したので連絡や顔を合わせている。ことしは、地域とのつながりが推奨されていない環境であるので、私が昨年感じたこととは違うところがあると思うので大変だと感じる。

【回答：伊藤さん】

移住したきっかけは、そこに稼げる仕事があったからだと思う。実際に移住、独立して感じるが、お金を稼げないと住んでいけない。観光で呼び込むだけでなく永住を盛り込むのであれば、何ができるか、生活できるのかという提案が必要。それも岩手県ではないとできないものを示していかなければならないと思う。今副業が解禁されているが、テレワークが盛んなので確実に稼げる仕事が岩手県にあればいいと思う。知るところでは、一戸町は竹籠づくりが盛んで、東京で仕事をしている人が二戸市に移住して、休みの日に竹籠を編んで、収入が結構ある副業をしている方がいる。現実的な提案が必要だと思う。

同年代のつながりは、二戸市は知らない人だけ。移住して、地域おこし関係の仕事をしていると、自然と移住者やSNSがあるのでネットワークはつながることがあるので、それほど心配することはないと思う。逆に地域だけだと、小さな集まりにのめり込むと視野が狭くなって、悪い影響が起きると思う。

○米内紘正議員

移住を現実的に考えた場合、そこで体験したというきっかけがないと、テーブルに乗らないと思う。テーブルに乗ったうえで、仕事がないと先に進まない。どこでどのように体験していくかということは難しいと思う。小中学生や高校生をたくさん呼び込めるのかというと、営業活動が必要となるので、毎年寄附額が多くなっているふるさと納税はいかがかと思う。どの地域も肉やお米かという同じような商品が並んで、その中で優位性をとれるのかというとなかなか難しい。体験型のふるさと納税が岩手県も少ない。そこで、地元の体験をしてもらいながら、自然や食になじんでもらえればいいと思う。

その辺を、市町村単位で提案していただきたい。見せたい体験はもちろんであるがマーケティングで何を求めているのかだと思う。ふるさと納税はすべての自治体が選択肢にあるので、何を検索して、どういう趣味の人がいて、その趣味を強引につなげて地元を売り込むというようなものがあれば面白いと思うの

で、考えていただければ面白いと思う。

○佐藤ケイ子議員

仕事があれば食べていけないし、若者が地域から出ていく理由に地域のつながりが煩わしいというのもある。地域おこし協力隊でいらしている方は、地域の優しさがいいとおっしゃるが、逆に地域のつながりが濃すぎて嫌だという人もいます。お聞きしたいのは、地域のつながりで、いいと思っているところ、遠慮したいところがあるのかどうか。

それから、洋野町に神奈川県から 200 名の高校生を受け入れられたという話であるが、受け入れ家族を折衝する事業は大変なことだと思うが、どのようにしてやったのか。旅行会社を訪問しているということについても少し詳しくお聞きしたい。

【回答：田端さん】

関西圏から来た人間としては、こちらの地域は人数の関係もあると思うがつながりは深い。例えば、名前を挙げただけで、どこに住んでいるあのんだとかわかるなど、そういう面では、情報の伝わり方や子供たちの安全などはポジティブに感じていい部分があると思う。私が住んでから思うのは、保護者の年代の方やお年寄りには固定概念が強い人が多い。私はこうしてきたからこれは違うというような、特に外からきている人間からすると、その常識は全く通用しないことが多く、自分の考えを頼りにして地域おこし協力隊を募集していることがある。住民の方に、それは違うと言われたら、気にする移住者は多くいると思う。本当にやっていいのか、やり方を変えなくてはならないのかなどそういうことに関しては、もう少し寛容性が必要だと思う。地域おこし協力隊という制度もそうであるが、住民の理解という部分でもう少し周知しながらやっていかないといけないと思う。

【回答：藤織さん】

私は煩わしさを感じるタイプ。久慈市に住んで5年経つが、最近になって久慈市民になったと言われて、地域おこし協力隊になった時点で久慈市民として移住しているのに、今まで認めてもらえてなかったのかと思う。悪気はないのですが、そういう言い方をすると、結婚したのか、子供はつくらないのかは言ってはだめだと思う。それらはとても多く、毎回言われて否定することも面倒だと思う。移住した当時からお米や野菜をもらうなど優しい面や、寒くないかなど言ってもらえる面があるが、都内ではセクハラ、パワハラと訴えられそうなことを言う人は多いと思う。世界的にLGBTなどマイノリティーがある人を受け入れようという世の中で、田舎はそうでなく、考え方を大きく変えていかないといけないと思う。固定観念を持っているお年寄りなどは難しいと思う。

【回答：大原さん】

私は地域のつながりはそこまで気になっていない。ちょうどいい感じで付き合っていると思うが、こちらの出身の妻は子供の頃、どこの高校に行ったなど情報がすぐにわかるのは嫌だったと言っている。地域から出ていきたくったという話もある。逆にそのようなことが新鮮だった。

私の両親は宮城県気仙沼市と加美郡から仙台市に出てきた。仙台市にゆかりはないが、洋野町では代々名前が続いており、ルーツがわかるということなどつながりが残っていることは新鮮なことである。逆に地域の愛着につながると思う。近所の人から食べ物をもらうことなど普通にあることなのでその辺はありがたいことだし、つながりが続いていることはいいと思う。回覧板を回さなくてはいけないなど、なじみのないことは大変だと思う。

〔回答：城下さん〕

地域のつながりは、近くに住んでいる方が食べ物をおすそ分けしてくれるなど気にかけてくれることが嬉しい。

街の中で自動車を覗かれることがあり、顔を確認してこようとする人もいて、驚いたこともあった。

私は1年半程度しか洋野町にいないが、新しく地域おこし協力隊や移住する人が来たときの緩衝材が必要だと思う。知らない土地に来た時には怖いことやびっくりすることがあると思うが、少し先に地域に来た人たちが、悪い人が来たからにらみつけるというわけではなく、深い意味はないということを少しずつ伝えていくことも大切だと考えることがある。

民泊で、どのように受け入れ先を探したのかについてであるが、営業活動については、地域のつながりを活用した。ゼロから1人で探したわけではなく、役場の方と一緒に探したが、過去に受け入れ経験がある家庭に訪問して、今回神奈川県の高校生が来るので受け入れ可能か確認し、快く承諾していただける家庭もある。都合が悪いときなどは、ただ引き下がるのではなく、御近所で誰か受け入れてくれそうか聞き取りして、情報をいただいたので訪問したと言うと断りにくいというか、そこから広がることもあった。

営業活動については、教育旅行について首都圏、大阪府、北海道など商談会のようなイベントがあって、旅行会社に来ていただいて、岩手県の各市町村担当者が商談を行うという活動を行った。私が飛び込み営業で旅行会社を回ったというわけではない。

〔回答：伊藤さん〕

地域のつながりについては、農家特有の閉鎖的な環境が多く、私自身が東京で長く仕事をしてきたため、特に気にする人間なので慣れるまでに気を遣う。私はお酒が飲めないが、酒が飲めないのかと言われることもある。この場合はお酒が飲めないことを根気強く説得することが必要かと思う。事前の知識として持っていれば衝突は避けられると思う。田舎のような人間関係が濃いところでも良好な関係を築けられるので、突然飛び込むのではなく事前の知識を持つことで解決していけると思う。

○佐藤ケイ子議員

ほかの視点を大事にするべきということで、地域おこし協力隊の皆さんに期待をしている部分は多い。昔からの地域の経験やしきたりは、岩手県にはかなり根付いており、役場や住民の方にも広く受け入れられるような雰囲気づくりは行政もつくらなければいけないと思う。

○ハクセル美穂子議員

主人はアメリカから来て、十数年も住んでいるのに見た目も違うのでいつまでも土地の人になれないような気持ちがある。

皆さん仕事があるから来られたという話をされていたが、最初に情報として得たのはどこなのか。雑誌、インターネット、知人からの紹介など、どういうきっかけで地域の情報を得られたのか。

地域振興というテーマだが、観光客がたくさん来て、お金をいっぱい落としていくことがいいのか、それとも地域にとってちょうどいい人数が住めることを目的としたほうがいいのか。本県は広く、三陸地域など状況が違う中で、そこを目指してもそうはならない。地域おこし協力隊や移住者の方が来て、ちょうどいい人数で住みやすいことがいいのか。実際に住んでどういう感じの地域について皆さんは望んでいるのか。

〔回答：田端さん〕

情報を得たのはインターネット。地域おこし協力隊の制度は知らず、岩手県の駅前で働いていて大丈夫かとか調べていたときに地域おこし協力隊のことを知った。

観光客を含めどんな地域にしたいかについては、私は、分ける必要はないと思う。どちらもやるべきだ

と思うし、どちらも進めていかないと意味がないと思う。地域おこし協力隊が来る意味は、一つは自分がやりたいことをその場所でやりたいということと、その地域をどうにかしたいに分かれてくると思う。地域に住んでいる人が、その地域限定のイベントだけ培って死んでいくのはもったいないと思うので、地域おこし協力隊が地域に入って、そこから、観光客が来て、この地域はいいところだという発見があると思うので、どちらも続けていくことが大事だと思う。

〔回答：藤織さん〕

久慈市の場合ほどどれだけ観光客を誘致しても、あまちゃん時代を超えられないと思っており、今後どれだけ力を入れてもその程度だと思っている。観光客が来すぎて困るということにはならないと思う。それは、移住に関しても同じで、どんなにPRしても受け入れられないくらい移住者がふえて大変だということはないと思う。思いきりPRしても平行線ということが実情だと思う。

移住するきっかけは、お芝居で全国を回っていて、たまたま久慈市に来た。一般社団法人久慈市観光物産協会の募集広告ポスターが道の駅にあった。

〔回答：大原さん〕

募集を知ったのはインターネット。仕事を探し始めたところで地域おこし協力隊制度を知った。

観光客がたくさん来たほうがいいのかについては、地域おこし協力隊の募集もだが、質が大事だと思っている。地域おこし協力隊は誰でもいいわけではなく地域のためになるかが大事。観光客へは、岩手県にはコンテンツが多くないため今の岩手県のコンテンツできちんとPRすれば、悪い観光客は来ないと思う。小さい地域で考えると宿泊施設などのキャパシティーがないのもどかしい。

〔回答：城下さん〕

地域おこし協力隊を知ったきっかけは、大学で地域づくりなどの授業を専門に受けていた。授業を受けているうちに、先輩が地域おこし協力隊になったため、進路の選択肢の一つとして持っていた。

人が多く来ることを望んでいるのかというと、民泊をしていて感じることは、子供たちはごはんがおいしい、人が優しい、星がきれいなど民泊先も神奈川県の高校生いい子たちでよかったと言ってくれる家庭がいる一方で、次回の民泊を断る家庭もある。民泊が、地域の人負担となると、体験型観光を進めていかなければいけないとわかっていながらも、誰のためになっているのかと思うところがあり、答えは出ていない。

〔回答：伊藤さん〕

きっかけはホームページ。上司の目を気にすることなく自分の判断でできる仕事を探していて、二戸市に応募した。青森県出身なので北東北三県で探していた。

地域の産業については、何かに絞るのではなく広くやるのが大事だと思う。岩手県は土地が広いので、いろいろな利用がある。二戸市は新幹線が止まる駅でもったいないと思う。せっかく新幹線が止まるのでやりようがある。二戸市内だけで観光を絞るのではなく、二戸市から十和田湖へも行けるし、八幡平市も行ける。そこを拠点にして、広がる観光もあると考えている。

◆ 感想など

○城内よしひこ議員

私も東京から地元に戻ることが使命のように感じて帰ってきた。たまたま青年会議所があって、若いグループでまちづくりをしようという団体に入った時に聞いた言葉を思い出した。若者とよそ者と馬鹿者がいないとまちは活性化しない。そういうジェネレーションギャップがありながら、地域のエネルギーになる人は大事だと思っている。皆さんにはそこを期待している。地域で本来持っていなければならないエネ

ルギーが地域で育てられなかった分、皆さんに期待してると思っている。地域の煩わしい人間関係については、我々も感じている。

皆さんにはここで一生住んでもらうことがベストだと思うが、自分の地域を離れて岩手県に来てもらっているのだから、皆さんの地元でここで経験したことを還元してもらえればとも考えている。

農業は面倒な仕事の構造だが、一人親方であるためいろいろな技術を持つ人は他の人に教えない。だからこそ閉鎖的であるのだが、農業も捨てたものではないので頑張っていたきたい。

○中平均議員

私も、久慈の高校を卒業して12年間地域外で生活して帰ってきた。皆さんと同じく、久慈市内を車で走っていると、車種と色で特定されてしまうことから、電話が来て、今日は久慈にいるのかと言われる。また今までの話の中にあつた地域外からの人が馴染みづらいなのは、県北に限らず、いわゆる地方ではよくあることではないかと思うし、そういう中で皆さんが移住していただいて活動してもらっていることは大変ありがたい。現在のコロナ禍において、推進が呼びかけられているテレワークなど、官公庁は進んでいないが、常態化することによって、今後は仙台や東京など都市部に久慈市から月1回出勤すればいいとか、他にも副業で収入を得ることが可能になってくることなどから、都会に勤めながら、短期的、長期的に、地方に来やすい状況になってくることが想定される。

コロナ禍における就業形態の変化を活かしながら、地域を活性化していくことが必要だと考えている。

そこで、田端さんと藤織さんにお伺いしたいのがお二人とも新規で事業を立ち上げているが、どのように料金設定したのか。久慈市では多く見かける職種ではないので、適正価格の設定・消費者とのマッチングの考え方について私自身も悩むところであり教えていただきたい。

○小林正信議員

皆さんのお話を聞いていて、さまざまヒントになることが多いと思った。コンテンツを地域が準備していくことがとても大事。その人がやりたいことカフェなど、地域が土台をしっかりとつくった上でやりたい人を受け入れていくことが大事という気がした。行政の取り組みも非常に重要と思う。地域には必要な人が来ているし、そこで使命を果たしていくことがこれから重要になっていく気もした。そういう人を大事にしていく取り組みも必要である。

大原さんにお聞きしたいが、地域おこし協力隊制度に限界があるとおっしゃったが、そこをもう少しお聞きしたい。岩手県で地域おこし協力隊が起業する上の課題も教えていただきたい。

○田端さん

私は、やりたいことを地域に持って来た人をサポートできるのか、最初から地域でやるのが決まっている人をマッチングしてサポートできるのかという部分が一番大事だと思う。やりたいことをサポートするのであれば、それを稼げるようにしていかなければならないが、住民の方の理解もある。その土台をつくるために、城下さんがやっているような、小さい頃からの受け入れや、逆に地域から出ていくことが、子供たちはこういう意見を持っていて、この地域とは違うという意識を持つことを少しずつの積み重ねでやっていくしかないと思う。また、地域から出ていく子供たちも自分の地域はこうだったと振り返るときが来ると思う。そういうことの積み重ねが必要であると思う。行政などのサポートと言っているが、地域へ来る側も、どのような地域であるかということを理解しないといけないと思う。

料金設定はこちらに住んでいる方のほうが難しいと思う。特に商売気がない地域であるため、原価設定が安い、継続性がないということがあつた。私は、新しいことを創めるチャンスの場合だと捉えているので、基本的にこちらでつくっているものはつくらないようにしている。価格設定する上で、元々あるものに関しては皆さんのほうが知識はあるし、わかると思うので、わかるものはつくらないようにしている。継続性を求めるために、付加価値は必ずつけるべきだと思う。例えば、コーヒー1杯で450円としているが、

それに対して、カードを作成してきょうのコーヒーの味やシール1枚のイラストをつけることなど、そういう部分で値段設定をしている。

○藤織さん

価格設定について、現在お土産品雑貨や山菜加工品をつくっている。東京などに売りたいと考えて山菜加工品をつくったが、このコロナ禍で厳しい面もあり、高めの価格設定としている。高めというか、この地域にしては高いと思う。お土産品など久慈地域は割と安く、原価を考えるともう少し上げたほうがいいと思うことがある。値段を下げることは後からでもできるので高めに設定している。この地域だけで売っていくとなれば難しいと思うが物価が安すぎて厳しい。

私の希望となるが、田舎独特のデリカシーやマイノリティについて個人的に考えている。多様性が大事にされていく世界の中で、地方がどれくらい追いつくのか、先手を取っていけるのか、地方のほうが生きやすくなると思えばいいと考えている。個人個人の心持ちかもしれないが、いろいろな制度をつくることのできるのではないかと考えている。誰もが生きやすい岩手県になっていくといいと思っている。

○大原さん

私が感じた地域おこし協力隊制度の限界については、任期が3年しかないということ。その中で次の道をつ自分でつくっていかなければならないというところがあった。そうなると、つくられなければ別の地域に行くことになるので、その辺に限界を感じた。また、小さな地域だと観光などは役場が主体となる。大きい市町村だと民間がするので、小さな地域でも民間での受け皿が必要だと思っている。

必要な支援としては、起業することが正しいわけではないが、その人が行きたい方向を導けばいいと思っており、結果的に地域のためにもなると思う。私も元々観光担当として活動していたが、結果的に全く違うことで起業した。やっていく中で、本人の考えは変わるので、それをしっかり受け入れて支援していく。それと同時に地域からの目があるので、バランスを取りながら支援をしていくことが大事だと思っている。

○城下さん

いろいろな話を聞いていただいてよかった。私は昨年7月に地域おこし協力隊に採用になって、昨年度は民泊の受け入れや誘致活動を行うことができたが、ことしは、昨年のような活動が一切できなくなった。予定では、埼玉県と神奈川県の学校生徒の受け入れを予定していたがゼロになった。来年度以降の受け入れに関わる営業活動が行えなかったことにより、予定はゼロとなっている。観光業だけではなくいろいろな職種が大変なのは承知しているが、今年度採用の地域おこし協力隊の方々には、洋野町に引っ越してきて、歓迎会もなく、地域の方々とのコミュニケーションもなく、夏祭りも知ることがなく年末になった。興味を持って洋野町に来てくれているのに何も経験や体験をすることがなく、限られた3年という任期の中の1年が終わろうとしている。私も2年目ではあるが、貴重な1年が先を見通せなく終わっていくと感じている。そういったことがあるということを知っていただきたい。

○伊藤さん

普段1人で農作業しているので、人が集まる中で話すのは刺激となった。生産者と地域振興がどう結びつくのか、場違いだと思っていたが参考となる話が聞けて今後の活動の糧にしていけたらと思う。

農業生産者として、地域振興にどう貢献していけるのかと考えていたが、ブランド力をつけて外に発信していく力が必要だと思う。はるかというリンゴ品種が地元では盛り上がっているが東京では知られておらず、外に知ってもらうことが大事だと実感している。これからも岩手県のリンゴを知ってもらう活動をやっていかないと感じる時間だった。

○吉田敬子座長

テーマを若者の外部の視点から見た県北地域と地域振興についてとして行ったが、さまざまな視点での意見があり、きっかけづくりや仕事があるのかどうかなどが大事だと感じた。皆さんには、今後も岩手県に住み続けていただきたいと思っているが、生き方や働き方という新しい視点でもぜひ発信をしていただきたいと思う。コロナ禍で大変な任務をされているということも改めて受け止めて、県政に代えさせていきたいと思う。

頂戴した御意見、御提言いただいたことに感謝を申し上げ、閉会とさせていただきます。